第５章　考察と総括

第１節　縄文時代・弥生時代遺物分布状況

川添和暁

はじめに　室内整理調査では、土器は総計 900 点程度・総重量 8,930.5g、石器・石製品は総計 866 点を確認した。出土遺物を器種・帰属時期に分類後、該当種別を抽出して分布図を作成した。分布図では、10m グリッド別に点数と総重量、さらには総重量を点数で割り算した数値を示した。この計算値は土器･陶器であれば値が小さいほど細片化が進行したこと（ここでは細片化値と称する）を示しており、遺跡の形成状況・場の利用を示すのに有益な値となる。報告者は、主に担当あるいは関わることのできた整理調査にあっては、遺跡の時期・時代・種別に関係なく一貫して報告してきた（川添編 2012※）。なお、この整理のような報告を実施するには、発掘調査時からの一貫した方針があって初めて有効であることを、ここでは改めて提示しておく。なお、トーンは遺物の出土グリッドを示しており、その濃淡は、点数・総重量・細片化値、いずれかあるいは複数項目で保存が良好であると、相対的に考えられるグリッドをより濃く示した。

縄文土器・弥生土器　これまで報告した通り、遺物の出土分布は、遺跡調査範囲全体の北東部の 19A 区・19C 区と、遺跡調査範囲全体の南西部の 14 区・19B 区とに大きく二分される（図 124-1,2）。前者は縄文時代草創期末～早期前半の遺物が、後者は縄文時代後期～弥生前期までの遺物がまとまって出土している。状態が良好なグリッドは、3223･3336･3434･3435･3735 で、竪穴建物跡内ではなく、むしろ炉穴や包含層（捨て場）に偏る傾向がある。また、グリッド 3336 では 2429SK 内から横位で深鉢が出土している(0408)。検出されている遺構内容や、細片化値の高い（つまり細片化の進行程度が低い）遺物の存在は､当地が活動当時の地形･地盤に近い状態状態であることを示している。19A 区・19C 区は遺跡外北西側から延びる片麻岩を岩盤とする細い尾根状地形が南東方向に向かって伸びる場所に当たる。この地山地形を南西方向に辿ると、14 区・19B 区では谷地形となっており、当時の活動範囲の境を示している。万瀬遺跡の中でみると、当時の集落の境とも言えるかもしれないが、川向南地区全体で見るならば､同様の活動痕跡は大栗遺跡でも確認されている。今回の報告で、大畑遺跡が立地する岬状の尾根の付け根部の両側に、縄文時代早期前半の活動痕跡が確認されたことになろう。

縄文時代中期後半～晩期初頭については、19C 区でごくわずかな出土があるものの、14 区での出土が目立つ。いずれもグリッド 3930 での出土が著しく集中している。出土点数も 500 点ほどと、今回の調査で出土した縄文・弥生土器の半数がこのグリッドから出土していることとなるが、細片化値も 10 ～ 20 と決して低くはなく、細片化の進行もそれほどではない。発掘調査進行時は、出土層をオリジナルと判断して進めたところではあったが、出土層下から中世の活動痕跡が見つかったことから、この層は二次堆積層であるこ

※　川添和暁編 2012「塚原 1 号窯跡」『塚原 1 号窯跡・若宮 1 号墳・山口堰堤 3 号墳』
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 169 集

とが判明した経緯がある。以上の状況を整理すると、これらの遺物は、二次堆積であってもその移動距離はとても近く、細片化の進行がそれほどでもなかった可能性が考えられよう。例えば、県道（遺跡範囲内中央に貫く道路）付近にあった堆積層がなにかの要因で流れ込んで来た可能性が高いのできないかと考えられる。なお、19C 区での出土に関しては、当地にもともとオリジナルな活動痕跡が存在していた可能性が高い。19C 区では斜面上方からの土砂の供給が認められない場所であり、活動痕跡は削平される一方であることは、遺跡の残存という点では条件がいいとは言えない。大型石棒に相当する使用のなされた遺物も出土しており（1301）、このことを傍証する根拠であると言えよう。

縄文晩期中葉～弥生前期に関しては、19B 区での分布が主体となる。この場所は、19B 区・14 区に向かって展開する谷状地形に堆積した黒色土内からの出土である。注目されるのは、3728・3729 グリッドでの出土状況である。特に弥生前期の深鉢（0317）は残存状況が良好であり、当時の捨て場など、オリジナルの遺物包含状況であった可能性も考えられる。

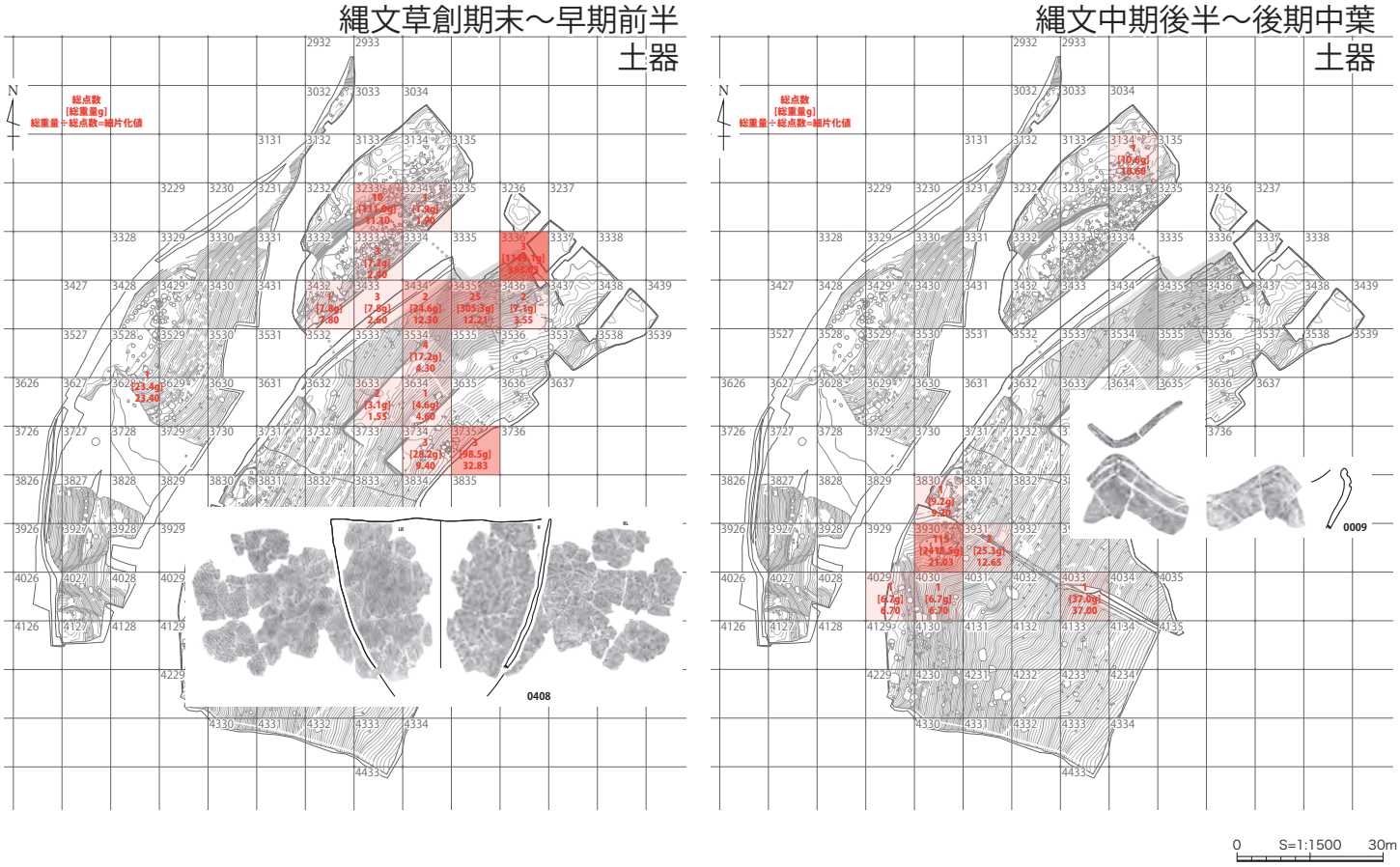

図 124-1　万瀬遺跡 縄文時代遺物分布図 土器 (1) (S=1/1500)

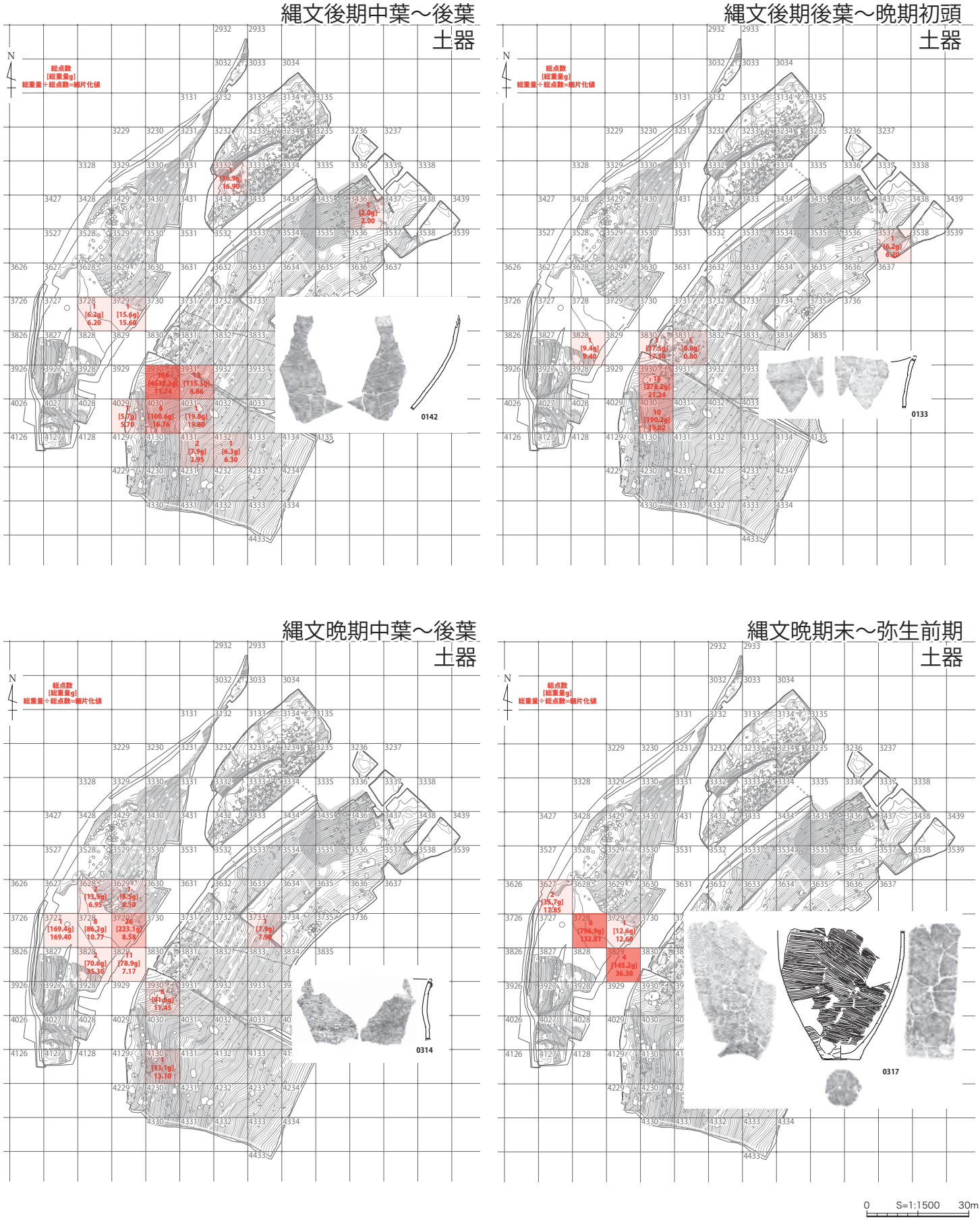

図 124-2　万瀬遺跡 縄文時代遺物分布図 土器 (2) (S=1/1500)

石　　器　上記のように土器片の出土状況から、遺跡の状態を推測してみた。それに照らし合わせる形で、石器の出土状況を、器種・石材別に同様の分析・検討をした（図 125-1~5）。石器に関しては、二次堆積になっても端部の磨滅化は進行するものの、身自体の細片化は土器片ほど進行しない。むしろ器種法量の平均値を示しているとみていいであろう。

木葉形尖頭器・有舌尖頭器は 19A 区から出土している。当地の地形がそのまま残っているのであれば、出土は当然ではあるが、特に有舌尖頭器の状態を見ると著しい欠損状況での出土であり（1046・1105）、石器使用当時、当地は狩り場であり、狩猟後に道具の回収がなされなかったことを示すものであろう。

石鏃やそれに関連する小型剝片石器剝片・石核の出土を見ると、19A 区・19C 区と、14 区・19B 区との状況が対照的である。もともと 14 区・19B では、この小型剥片石器の出土が極めて少ないのが、注目される。その一方で、19A 区・19C 区に溶結凝灰岩・凝灰岩の出土が集中していること、点数は少ないが下呂石が 14 区から出土していることは、主たる使用時期に対応した石材使用状況を示しているといえる。

上記の傾向は、安山岩各種の分布にも認められるが、安山岩 B の剝片石核を見ると全体に分布が広がり、打製石斧に関しては、14 区・19B 区に集中する。この打製石斧の分布状況は、万瀬遺跡内での縄文後期～弥生前期の場の利用状況を反映しているといえる。

磨石敲石類は、19A 区・19C 区と、14 区・19B 区でともに出土している。植物加工道具として、付近には集落や加工場であったことを示すものであり、当時の積極的な場の利用があったことを示しているといえよう。

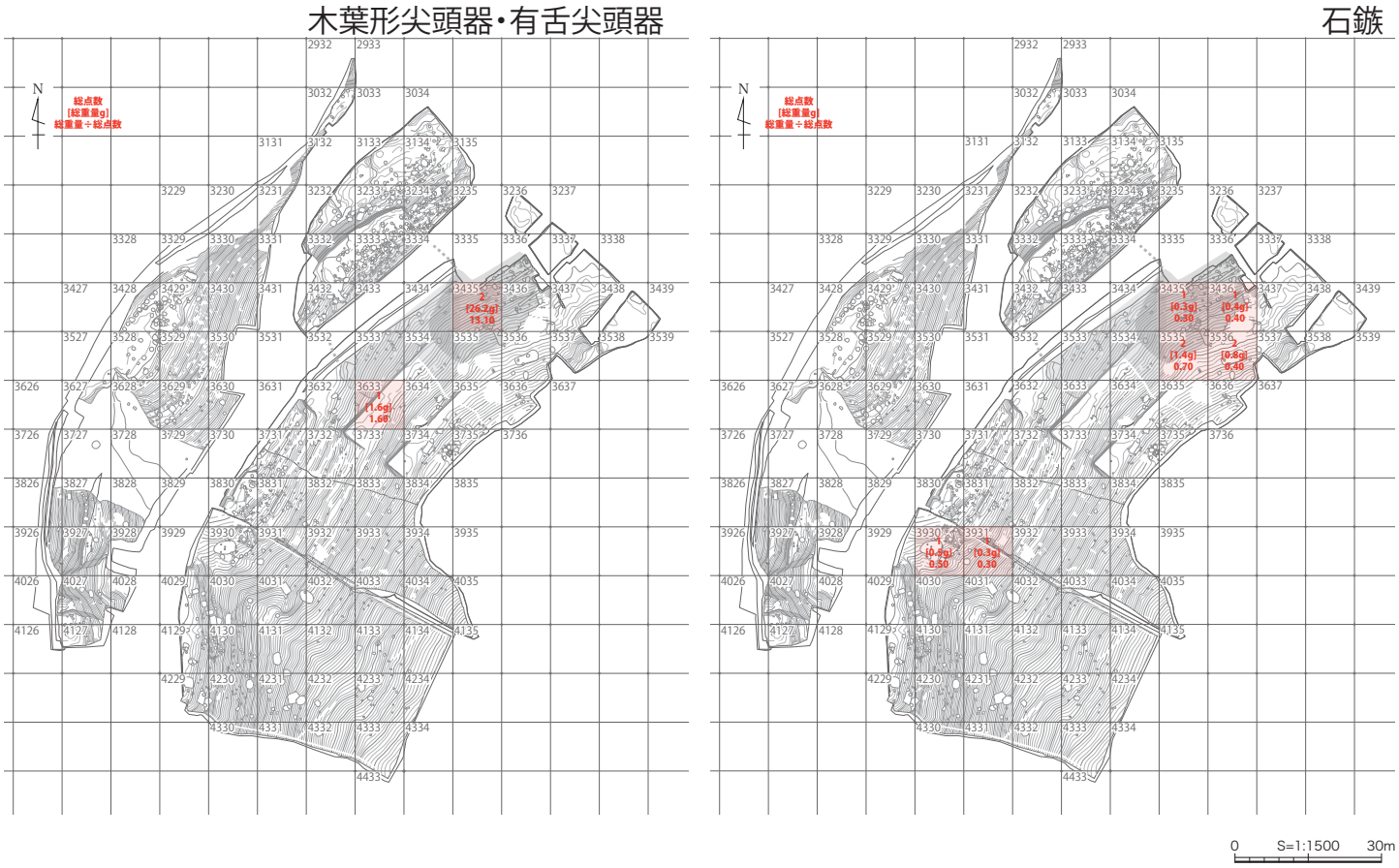

図 125-1　万瀬遺跡 縄文時代遺物分布図 石器 (1) (S=1/1500)

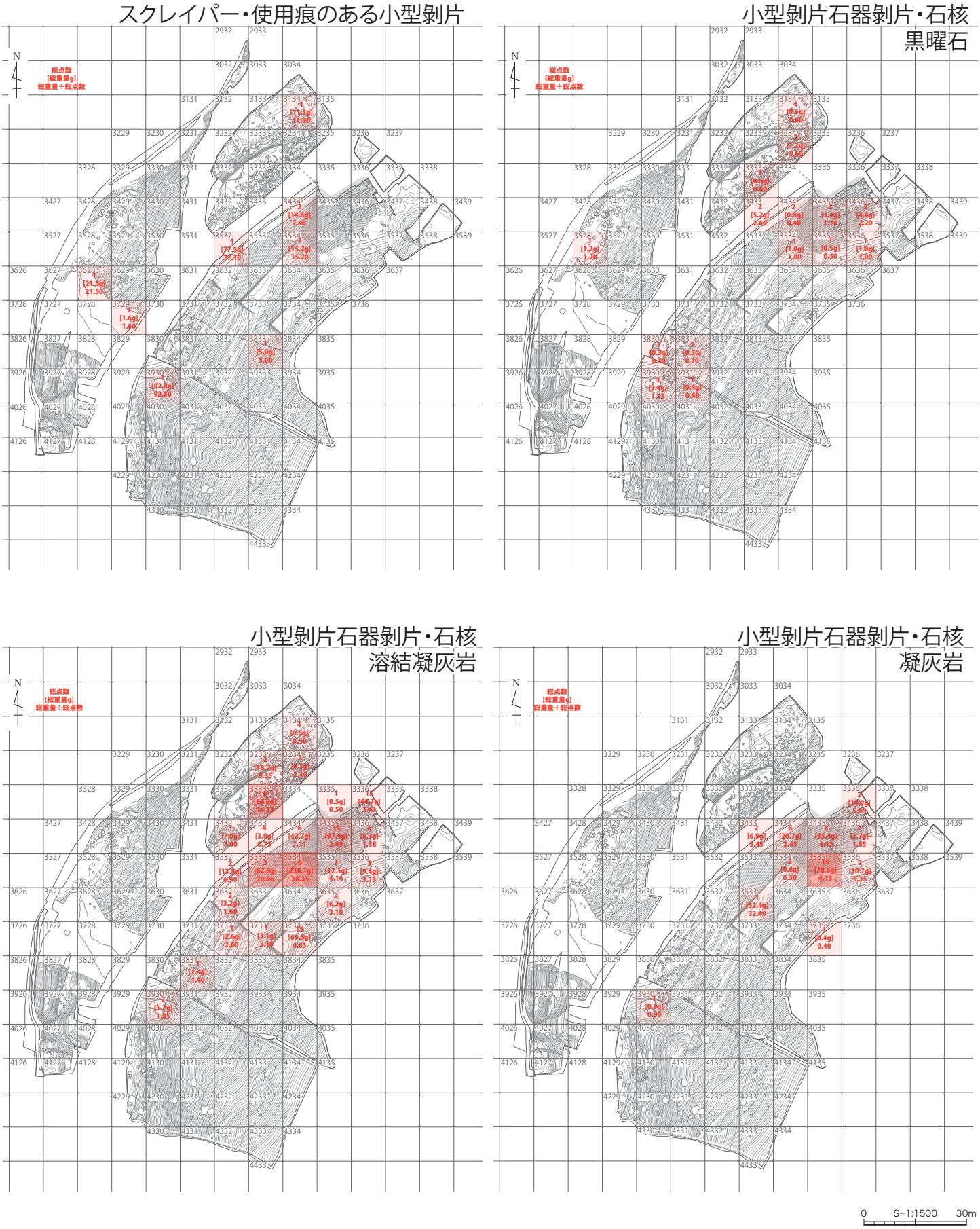

図 125-2　万瀬遺跡 縄文時代遺物分布図 石器 (2) (S=1/1500)